HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダグール語の終助詞
Author(s)	山田, 洋平
Citation	北方言語研究, 7, 83-98
Issue Date	2017-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64512
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_yamada.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 7: 83-98（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2017）

［資料・研究ノート］

ダグール語の終助詞

山 田　洋 平
（東京外国語大学博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC2）

1. はじめに

本稿ではダグール語[1]の終助詞[2]について考察する。ここで扱う終助詞とは、次の例[3] (1)~(3)の下線部に見るような文末に現われる小辞のことであり、聞き手への働きかけなどモーダルな文法範疇に関わるものである。ダグール語の代表的な先行研究である恩和巴図（编）(1988) における「語気詞」の一部がこれに該当する。

(1) [H] *taa namd nek aišil-ǰ uk-wei=taa=yee?*
2PL 1SG.DAT one to.help-SIM to.give-NPST=2PL=*YE*
ちょっと手伝っていただけませんか (目上の人に対して) 塩谷 (1991: 91)

(2) [H] *šinii šinken magel emes-sen-ii-šeni činčil-sen uwei=b=kee.*
2SG.GEN new hat to.wear-PERF-GA-2SG to.notice-PERF EXIS.NEG=1SG=*KE*
あなたが新しい帽子をかぶっていることに気づきませんでした 塩谷 (1991: 82)

(3) [Q] *bii nee-ø šad-g-wu=mee, šii ir-ǰ nee-ø=kenee.*
1SG to.open-SIM to.be.able-PTCP-NEG=1SG 2SG to.come-SIM to.open-IMP=*KENE*
私は開けられないんだ、ちょっと開けてくれないか

本稿ではダグール語に見られる終助詞を定義し、その用法を紹介する。その上でモンゴル

[1] ダグール語 (ダグル、ダウールなどとも) はモンゴル語族の言語で、中華人民共和国東北部を中心に分布する。中国におけるダグール族の民族人口は 13 万人ほどであるが、とくに都市部においてはダグール語を解さないダグール人の若者もいる。方言は黒竜江省チチハル市を中心としたチチハル方言 [Q]、内モンゴル自治区フルンボイル市モリダワ・ダグール族自治旗を中心としたブトハ方言 [B]、同市ハイラル区を中心としたハイラル方言 [H]、そして新疆ウイグル自治区タルバガタイ地区を中心とした地域の新疆方言 [X] に分類される。本稿においては終助詞の使われ方に方言差が反映される事実は見いだせなかった。
ダグール語の表記に用いる音素目録は次の通り。/a, e, i, o, u/ /p, t, k, b, d, g; m, n[n~ŋ]; s, h; š, č, ǰ; l, r; y, w /. 母音は基本となる短母音それぞれに対応する長母音があり、母音音素を 2 つ並べることでこれを表す。/ie/ は [e:] または [ie] として実現する。子音はそれぞれに対応する口蓋化子音 (子音の後に /i/ をおいて示す) と円唇化子音 (同じく /u/ で示す) がある。ダグール語は他のモンゴル語族の言語と同じく主要部後置型であり、語順類型から見ると「日本語によく似た」言語であると言いうる。

[2] 終助詞という用語には上位概念として「助詞」があると考えられるが、もとよりこの用語は日本語学での使用を援用したものであり、ダグール語やその他モンゴル語族の言語について「助詞」という品詞を積極的に立てるものではない。図 2 中の B が連体修飾を受けるという点で名詞 (類) に分類し得るのに対し、品詞分類において終助詞は名詞と動詞を除くその他の語類「不変化詞 (類)」に属する。

[3] 本稿におけるダグール語の例文は先行研究からの引用であっても筆者の表記に改める。モンゴル語の例は正書法表記をラテン字に転写して用いた。その他、例文に付した例文番号、分析、グロス、和訳、下線等も筆者による。引用元を示していない例文は筆者調査によるものである。[ ] は方言 (注 1 を参照のこと) を示すものである。本稿で問題とする終助詞または終助詞かどうか疑わしいものについては、グロス上も代表的な形式を斜体大文字で示すのみにとどめた。

語やモンゴル語族の諸言語との異同に触れ、モンゴル語学における終助詞の扱いを提案する。終助詞の用法を明らかにすることで、述語の各形式の機能を含めたモンゴル語族の諸言語のモダリティ表現の諸相の記述に資するものと考える。ダグール語の終助詞に関しては十分な先行研究が無いことから、次節で風間 (1992) による接尾型言語の動詞複合体の研究と、ジンガン (2012) によるモンゴル語のモダリティ表現に関する研究を参照する。これらの研究における終助詞の扱いを概観し本研究での立場を示した上で、3 節ではダグール語の終助詞の用法を考察する。4 節では終助詞としては周辺的な要素 AA や述語人称を含む承接関係について述べ、5 節でまとめる。

2. 終助詞に関する先行研究

2.1. 風間 (1992) による日本語の終助詞の扱い

風間 (1992) は日本語を中心とした接尾型言語について、定動詞として用いられる場合の動詞複合体について検討している。日本語の定動詞として文末に用いられる動詞複合体の承接関係において、その最後に位置することになるのが終助詞である。風間 (1992) は日本語の終助詞 (=zo, =ze, =wa, =ka, =yo, =ne, =na, =sa, =tomo) に共通する特徴を次のようなものであると説明している。即ち、a. 屈折接尾辞のあとに現われる付属語であり、b. それ自体は屈折しない (それ以上後ろに屈折形式が付されることがない) ものである (ibid: 249-250)[4]。

さらに風間 (1992: 250) によれば、屈折形式のあとにつく付属語は「個々の動詞の語彙的な性質に左右されることなく，基本的にどんな動詞にもつき，さらに，形容詞や，名詞あるいは名詞述語にもつく，という性質がある。ただし屈折形式のあとにつくために，今度は屈折形式の種類によってついたり，つかなかったりということが考えられる」としている。その機能は判断のムードや働きかけのムードで、日本語の終助詞は後者にあたる (ibid: 254)。

2.2. ジンガン (2010) によるモンゴル語の終助詞の扱い

ジンガン (2010) はハルハ・モンゴル語のモダリティに関する包括的研究である。その中で終助詞についてもモンゴル語のモダリティ的な意味を担うものであるとして扱っている。これによると、ジンガン (2010) 以前にモンゴル語の終助詞的な要素について明確な定義を行った先行研究は無さそうである。こうした先行研究を概観したうえでジンガン (2010: 239) はモンゴル語の終助詞を次のように定義する。

(4) ジンガン (2010: 239) によるモンゴル語の終助詞

I 形式的特徴

① 文の述部のみに出現する。

② 語形変化（活用）しない。

③ 文中のほかの要素に依存せず、ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる力がある。

[4] これと同じ条件を満たす =daroo については、=de#ar[-oo] のように分析できる可能性があるため (ibid: 259) か終助詞とは区別されている。

II　機能の面では、話し手の命題に対する判断、評価など心的態度を聞き手に伝える際に、その判断や評価などへの聞き手の認識を促すための副次的心的態度をマークする。

②は風間 (1992) の「b. それ自体は屈折しない」に当たる。一方「a. 屈折接尾辞のあとに現われる付属語」に対応する特徴は扱われていないが、ジンガン (2010) は屈折形式を伴わない名詞述語なども想定しているためであろう。形式的特徴の①③は、「終助詞」＝「文末に現われるもの」を念頭に置いた特徴である[5]。

ジンガン (2010) は終助詞の用法を検討し、機能と承接関係を次のようにまとめている。図 1 では左に配置されたものほど述語部分に近い[6]。これによると終助詞の機能は、風間 (1992) の言う判断のムード、働きかけのムード両方にまたがるものと見られる。

	対事的	対事的かつ対人的		対人的
	真偽判断	説明叙述	情報伝達	妥当化
承接位置	mön biš	san bilee yum dag	süü šiv biz bol uu	daa

図 1. 「終助詞」の機能段階 (ジンガン 2010: 286. 図 13 より)

この研究はモンゴル語の終助詞について明確に定義し、相互の承接関係を考慮して機能のラベル付けをしており、モンゴル語学に資するところ大きいものであると考える。

2.3. 本研究での立場

風間 (1992) は日本語を中心に検討をしているが、ここで想定される接尾型言語にはモンゴル語族の言語も含まれると考えられる。以下では派生接辞、補助動詞、屈折形式、付属語からなる動詞複合体という見方の大枠が、モンゴル語族の言語にも適用できるだろうと考えて議論を進める。モンゴル語族の言語にこれを適用するに際し注意を要するのは、屈折形式の扱いである。風間 (1992) では主として「必須性」を根拠として日本語の屈折形式を決定しているが、これはモンゴル語学では伝統的に「定動詞 (法動詞、叙述形／希求形など)」「形動詞」「副動詞」などと分類される動詞形式を成す接辞に凡そ該当する。日本語の動詞の文を終止させる屈折形式 (モンゴル語では定動詞接辞が担う) のうち直説法はみな連体修飾節の述語になる用法 (モンゴル語では形動詞接辞が担う) をも持っている (=連体形と同形である)(5) が、モンゴル語でこれらは一部において区別される (6)。

[5] あとで見るように、モンゴル語やダグール語の先行研究における「語気詞」という語類は、「文末に現われる」という特徴を捉えた分類になっていない。

[6] 「終助詞」同士もこの承接関係に従って複数組み合わせて用いられることがあるが、必ずしも全ての組み合わせが用いられるわけではない。

(5) 日本語 ([ ] は屈折形式であることを表す)

ku[-ru]=yo / *ku[-ru]* *hito*

to.come-IND.NPST=SFP to.come-IND.NPST person

(6) モンゴル語

**ire-x=šüü* / *ire-x* *xün*

to.come-PTCP.FUT=SFP to.come-PTCP.FUT person 来る人

モンゴル語の -x による未来形動詞形は日本語の連体形に似るものだが、文を終止させる用法は持たない。言い換えると統語上、主文の述語として要求されない形式である。この動詞の形式を巡っては、次の例 (7) に見る =yum (YUM, 「〜のだ」) の現われに違いが出る。

(7) モンゴル語

a. *ire-x=yum.* / **ir-ne=yum.*

to.come-PTCP.FUT=YUM 来るのだ to.come-NPST=YUM

b. *ir-ne.* / **ire-x.*

to.come-NPST 来る to.come-PTCP.FUT

即ち、モンゴル語の =yum は「形動詞」 (PTCP) の後にのみ後続し「定動詞」(ここでは NPST) に後続しない (7a)。他方で未来形動詞接辞は主文の動詞述語としては用いることができない (7b)[7]。このことは =yum と「形動詞」の緊密性を示すとともに、主文の述語としては ire-x ではなく =yum あるいは ire-x=yum 全体がこれを担っていることを感じさせる。このことを考慮に入れると、先の図 1 は次の図 2 のように再編成できる。

	対事的	対事的かつ対人的			対人的
	真偽判断	説明叙述	情報伝達		妥当化
承接位置	mön biš	san bilee yum dag	**bol** **uu**	**süü** **šiv** **biz**	daa
述語形式	**A) 名詞述語**[8]	**B) 名詞か「形動詞」述語**		**C) 名詞か「定動詞」述語**	

図 2. ジンガン (2010) の終助詞を三つに分割 (網掛け部は改編なし、太字部に改編あり)

つまり (7) で =yum について見たように、基本的に「形動詞」の後ろに置かれるもの[9]を一つのグループにまとめる (図 2, B)。そうすると「説明叙述」の類がみな図 2 中の B に含

[7] ただし、補助動詞として用いられる baj「ある」についてはこの限りではない。注 8 も参照のこと。

[8] これらは以下に見るように本稿での分析にはあまり関係がないが、ひとまず本稿では A として分けておいた。これが「真偽判断」の意を成すのは名詞述語だからこそであると言える。

[9] ただし必ずしも厳密に線引きができるものではない。存在動詞 baj が述語となる場合、これに反する例も多い。これはむしろ baj の特殊性によるものか。さらに =uu は「定動詞」述語に後続する例も多い。B, C の中間的なものであるとも見なしうるし、機能面から二つの =uu を想定することもできよう。

まれ、さらに「情報伝達」から =bol と =uu が B に編入される。

本稿では統語上の性質こそが当該要素の意味や機能を決定付けるものであると考える立場に立つ。つまりこの図 2 でいう B と C の間の隔たりに、これらの文末の要素の役割の違いが現われるものと想定される。そこで**本稿において筆者は、図 2 中の「述語形式」右部 C の =šüü, =šiv, =biz, =daa を終助詞と呼ぶ。**定義は次の (8) の通りであり、これはダグール語にも適用される。

(8) モンゴル語族の終助詞の定義[10]

定動詞接辞に後続し得る、それ自体は文の成立に関与しない不変化詞

名詞や動詞のような屈折をしない不変化詞[11]が、定動詞接辞という屈折形式により示される文末に現われるという点で、この定義は風間 (1992) とジンガン (2010) の定義を内包するものである。さらにジンガン (2010) は「終助詞」が「ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる」としているが、本稿では終助詞を従える述語の形式が「ほかの要素の後続なしに単独で文を終了させる」＝「言い切りの形」であり、「無ければ文が成立しない」図 2 の B のような例を除外する (cf. (7))。筆者は、B の形式が動詞の形動詞形を要求することから (広い意味での) 名詞的な性質を保持しているものであると考える。

3. ダグール語の終助詞

3.1. 概要

本節では前節 (8) で挙げた定義に則り、ダグール語の終助詞について分析する。ダグール語の包括的文法記述である恩和巴図（编）(1988: 432-449) では、(8) に該当する形式を「語気詞」の一部に分類している。そこでまず恩和巴図（编）(1988) が「語気詞」として扱う形式を (9) に列挙する。

(9) 恩和巴図（编）(1988) の「語気詞」

1. 疑問語気詞 yee
2. 肯定語気詞 dee, yum, ǰak, mookie, šindee, AA
3. 否定語気詞 ul, es, buu, bišin, udien, uwei
4. 醒悟語気詞 kee
5. 推量語気詞 woo, kaw(oo), b(e)iǰ(ee), baa
6. 強調語気詞 l, kee, kunu, mak, mati
7. 譲歩語気詞 č, čii, čig, yeeš, yAA(č)

[10] ここではモダリティ的意味や機能の観点からは十分な検討ができていない。図 1, 2 を見るにここで扱う終助詞は表の右に寄るものであるから、「対人的ムードを担うものである」と暫定的に述べるに留める。

[11] ダグール語の品詞分類の考え方は以下の通り。定動詞接辞、形動詞接辞、副動詞接辞といった接辞が付される語類を動詞と呼び、その他の語類のうち格接辞や所属人称などの要素を付し得る語類を名詞 (類) とする。このいずれにも属さない語類を不変化詞 (類) と呼ぶが、この中には副詞的な語のような比較的独立性の高い語もあれば、本稿で扱う終助詞のような接語と見なすべき要素群も含まれる。

8. 猜測語気詞 aǰ
9. 祈使語気詞 kene, kenee
10. 呼喚語気詞 AA

語気詞とは、いわゆる不変化詞 (名詞類でも動詞でもないその他の語類) を意味で分類したものの一つで、恩和巴図（编）(1989: 432) は次のように説明している。

> 語気詞とは語彙的な意味[12]をもち、主に文末に置かれてその文全体にいろいろな補助的な意味あるいは情態的意味を加える語類である。ダグール語の語気詞は (人称付加成分を付すことができるなど) 一部を除けば屈折形式を有さず、文の成分となることはない。
>
> 恩和巴図（编）(1989: 432、筆者訳)

この説明の後半はいわゆる不変化詞一般に共通する特徴である。「主に文末」とされるが、3. 否定語気詞 ul, es, buu、6. 強調語気詞、7. 譲歩語気詞は文末に現われるものでない (=「単独で文を終了させる」ことはできない) ため、筆者が本稿で扱う終助詞には含まれない。

残る語気詞は文末に現われ終助詞的な振る舞いをするが、ここで問題となるのが (8) の要件を満たしているか否かである。例えば 3. に属する bišin, udien, uwei は、名詞述語か形動詞接辞にしか後続しないためここで除外できる。以下ではまず 3.2. で形式名詞由来の要素グループ (yum, jak, mookie) などを扱い、3.3. で疑問に係る要素グループ (=yee など) について、それぞれ終助詞とみなすことができるのか検討する。次いで「妥当化」の =dee について 3.4. で、推量に係るグループ (=kaw(oo)~=woo~aalwoo, =b(e)iǰ(ee)~=ǰ(ee), =baa, =aǰ) を 3.5. で検討し、残る =kenee などを 3.6. でまとめる。

なお、ダグール語の動詞の定動詞・形動詞接辞は次のようにまとめることができる[13]。

	形動詞用法	定動詞用法	
非過去	-g(u) PTCP	-bei, -n NPST	
過去	-sen PERF		*-laa~ -lii PST

図 3. ダグール語の定動詞・形動詞接辞

ダグール語は図 3 に見るように、モンゴル語族の言語研究に伝統的な定動詞接辞・形動詞接辞と呼びうる要素がまずもって少なく、定動詞接辞・形動詞接辞という分類が可能かどうかも疑わしい。過去の -sen は連体修飾節の述語を成す形動詞用法も、主文の述語を成す定動詞用法もともに有するため、(8) の要件の判断基準として使いにくい。そこで非過去の -g(u) に後続するか -bei, -n に後続するかが (8) の要件の判断の基準となる。この場合、後

[12] ここで言う「語彙的な意味」の意図するところは推しはかりかねる。
[13] 図 3 はかなり簡潔に体系をまとめたものである。恩和巴図（编） (1989: 350) は他にも「形動詞」の形式を挙げているが、これらについては出現頻度または生産性が低いものであると見て扱わない。他方「定動詞」の -laa, -lii の形式は無視できないが、やはり出現頻度が低いためここでは考察の対象としない。

者 -bei, -n が定動詞用法のみを持つ定動詞接辞であると判断され、これに後続するものを終助詞と呼ぶ。この他に希求の接辞 (命令 -ø, 意志 -yaa など) も定動詞接辞に含められる。

以下の議論では補助的な判断基準として主語との一致を示す述語人称の要素も用いる。述語人称は定動詞接辞および名詞述語による言い切りの形の直後に付されるものであるためだが、この要素について詳しくは 4.2. で後述する。

3.2. 形式名詞由来の要素

モンゴル語の例 (7) で見た =yum は図 2 において終助詞ではないとして除外した。これは「もの」という意味の語に由来する形式名詞であり、文法化は進んでいるが名詞としての性質を保持しているものであると考える。

ダグール語も、(9) で挙げられた肯定語気詞のうち yum, ǰak, mookie はモンゴル語の =yum に類する形式名詞由来の要素であり、共時的にも名詞としての性質を保持しているものである。ゆえに本稿で扱う終助詞の範疇からは除外する。

yum やこれの派生形 mookie (< yum+AA+kee か) は形動詞形の後ろに現われる。

(10) [B] *in* *hii-ǰ* *šad-gu* *<u>yum</u>=dee,* *tendee* *panšin* *aa-ǰ+aa-bei.*
3SG to.do-SIM to.be.able-PTCP *YUM=DE* so relief to.be-SIM+COP-NPST
彼はできるんだよね。だから安心してる 恩和巴図（编）(1989: 434)

(11) [B] *ene* *huu* *tend* *aa-ǰ+aa-gu* *<u>mookie</u>!*
this person there to.be-SIM+COP-PTCP *MOOKIE*
この人はやっぱりそこにいたのか 恩和巴図（编）(1989: 435)

ǰak は日本語「もの」の意味に対応する形式名詞と同形[14]で、「用法は yum とほぼ同じだが疑問詞疑問文には用いられない」(恩和巴図（编）1989: 435) という。恩和巴図（编）(1989) が挙げる例では定動詞接辞に後続する例は無く、いずれも名詞述語や形動詞形述語に後続するものであり (12)、ǰak そのものが格接辞を伴う例まで挙げられている (「屈折しない」とする恩和巴図（编）(1989) の説明に反する)(13)。

(12) [B] *el-gu-d* *huu-yii* *usugu-i* *ul* *sons-gu* *<u>ǰak</u>.*
to.say-PTCP-DAT person-GA word-GA NEG to.hear-PTCP *JAK*
言っても人の話を聞かないんだ 恩和巴図（编）(1989: 435)

(13) [B] *weer-ee* *ir-eer* *aa-gu* *<u>ǰak</u>-ii* *her* *hii-bei?*
self-REFL to.come-ANT COP-PTCP *JAK*-GA how to.do-NPST
自分で来ているのを、どうするか
(彼は勝手に来てしまうのに、どうしたら良いんだ) 恩和巴図（编）(1989: 435)

[14] yum に似た形式名詞として yoom もあるが、稀。「もの」の意味では普通 ǰak が用いられる。

従って (8) の基準に照らせば、(10)〜(13) に見る yum, mookie, ǰak は終助詞ではない。しかし次のような例も見いだせる。恩和巴図（编）(1989) は yum の変化した形式として yumoo, moo (< yum+AA) もあるとするが、定動詞形述語とともに用いられている。

(14) [B] *ekee, šii hertgaan enne sau-ǰ+a-b=ši=moo.*
sister 2SG why here to.sit-SIM+COP-NPST=2SG=*MOO*
姉さん、どうしてここに座っているの？ 恩和巴図（编）(1989: 434)

この形式は恩和巴図（编） (1989: 434) に 1 例だけ挙げられたものだが、疑問詞疑問文限定で用いられるという。ここで考えられるのは疑問を表すマーカーとして文法化が進むと終助詞としての性質が得られるという可能性である (cf. ǰak の「疑問詞疑問文に用いられない」という記述)。そこで次節では疑問の機能を持った要素について検討する。

3.3. 疑問を標示する要素

図 2 では、モンゴル語における極性疑問を標示する要素 =uu (/ =üü) が終助詞ではなく、より名詞的な性質を保持したものであると考えた[15]。他方、これに意味機能の対応するダグール語の形式 =yee は次に見るように定動詞接辞の後ろに用いられ、形動詞接辞 (-g(u)) の後ろに用いられることはない。名詞述語の場合でも述語人称の後ろにも用いられることから、終助詞であると言える。

(15) [B] *šii niaken usugu šad-bei=ši=yee*
2SG Mandarin word to.be.able-NPST=2SG=*YE*
あなたは漢語ができますか 恩和巴図（编）(1989: 433)

興味深いのは、ダグール語の疑問を表す終助詞が述語人称よりも後ろの位置を占めることである。述語人称を有する近隣の言語としてブリヤート語は述語人称の前 (内側) に疑問マーカーが置かれる。

(16) シネヘン・ブリヤート語
xugsʲin-tei oolz-aa=g=sʲa.
old.woman-COM to.meet-IMPF.PTCP=INT=2SG
ばあさんと会ったのか 山越 (2006: 292)

こういったモンゴル語族の述語人称は、もと主語代名詞が動詞述語の後ろに置かれる現

[15] しかし注 7 でも指摘した通り、モンゴル語の =uu は定動詞接辞の後ろに現われる例もあり、終助詞として認め得る特徴もある。同形の独立語 yum「もの」が認められる =yum「〜ものだ」と異なり、uu または üü という独立語は認められず (yuu (文語形 yagu)「何」と関連か?)、直前の音韻的環境に基づく母音調和や挿入子音による異形態を有することからその独立性の低さは確かである。

象に由来するものと思われる。嘎日迪 (2006: 370-371) によれば中世モンゴル語では SVO 語順と並んで OVS 語順や SOVS 語順 (主語となる語の反復) が一定の頻度でみられるという。ここでも主語代名詞は疑問マーカーよりも後ろに置かれる。

(17) 中世モンゴル語[16]

斡舌魯速惕_亦舌児格泥..(中略)..斡舌剌黒荅黒撒納	孛勒中罕	阿=中忽由	赤
orusut_irgen-i	*oraqda=qsan-a*	*bolqa=n*	*a=quy^u:*	*ci*
種名_百姓-行	被投入-行	做=着	有^麼有	你
PN_citizen-ACC	to.be.yielded=PERF-DAT	to.make=ASS	to.be=FUT.PTCP^INT	2SG

「オルス人衆を、(中略) 降服られたる者になしてやある 汝は。」(小澤訳)

(四部叢刊本『元朝秘史』12 巻 34 丁, 小澤 1997: 227)

(16)(17) もこれらの言語では述語と疑問マーカーの間に述語人称 (主語代名詞) が入ることは無い[17]。一方ダグール語は疑問マーカーの終助詞化が進み、形動詞接辞に後続することができなくなったのである[18]。

(18) 疑問マーカーと述語人称の承接

動詞語幹-形動詞接辞=疑問マーカー=述語人称 (ブリヤート語など)

↳終助詞化の程度が低く、名詞的である

動詞語幹-定動詞接辞=述語人称=疑問マーカー (ダグール語)

↳疑問マーカーは後ろへ移動し終助詞化が進んだ

前節 (14) でみた =moo も疑問詞疑問のマーカーとして文法化が進み、終助詞となったものと考えられる。類例が塩谷 (1991) で疑問詞疑問を標示する imee として挙げられているが、これは形動詞形に後続する例しか挙げられていない (19)。ハイラル・ダグール語における当該形式の文法化の度合いの低さとも言える[19]。述語人称との共起例は無い。

(19) [H] *ter yuguu eimer-tii čangel-ǰ+aa-gu imee? ter-ii wačir-i-ini*

that why such-PROP to.be.tired-SIM+COP-PTCP IMEE that-GA reason-GA-3SG

med-wei=ši=yee?

to.know-NPST=2SG=*YE*

彼はどうしてこんなに疲れているんだ。理由を知っているか？ 塩谷 (1991: 93)

[16] 記号 (-_=^) の使用は出典による

[17] ただしいずれの言語も必ずしも形動詞接辞の後ろにしか疑問マーカーが現れないというわけではない。

[18] これについて、近隣のモンゴル語族の言語ハムニガン・モンゴル語では形動詞接辞に述語人称が後続し、かつその後ろに疑問マーカーが置かれる例があることを査読者の方からご指摘いただいた。ダグール語とハムニガン・モンゴル語の間には、形動詞接辞を付した動詞形が定動詞的に用いられうるかどうかという点で違いがあるように思われる。

[19] この形式は必須のものではない。極性疑問における =yee は必須的なものである。

3.4.「妥当化」の =dee

=dee は恩和巴図（编） (1989) で肯定語気詞と呼ばれているもので、ここでは「妥当化」の機能があると見る。「妥当化」とは、この形式 =dee に類似するモンゴル語の daa に付されたラベルで、「話し手が一方的に伝える内容、あるいは聞き手への働きかけには何らかの正当な理由があるということを聞き手に認識させる」(ジンガン 2010: 278) ものである。

ダグール語の =dee は意志や命令など希求の定動詞接辞の後ろや (20)(21) 述語人称の後ろにも (22) 現われる。

(20) [H] *ter ene ewee tend tikeesee nogu-ee šamd uk-yaa=dee.*
that this mother there so dog-REFL 2SG.DAT to.give-VOL=*DE*
そこでこのおばあちゃんは、それならうちの犬をあげようね (と言った)

(21) [B] *šii ǰalg-aa usgulǰ-ø=dee!*
2SG to.continue-ANT to.speak-IMP=*DE*
続けて話せよ 恩和巴図（编）(1989: 433)

(22) [B] *ul uǰ-iič-ieč xuu xer ič-sen=ši=dee?*
NEG to.see-to.go-AGENT person why to.go-PERF=2SG=*DE*
見に行かない人が、どうして行ったなんてあろうか 恩和巴図（编）(1989: 437)

ダグール語の =dee はほかの終助詞とも組み合わせて使用され、恩和巴図（编） (1989) が挙げるものだけでも =yee=dee, =yum=dee, =kee=dee, =kaw=dee, =biǰ=dee, =aǰ=dee といった組み合わせの後ろ側として現れる。同じ肯定語気詞には šindee という形式が挙げられている[20]が、これも=dee から成ったものであろう。図 1, 2 でも見たようにモンゴル語の daa が一番外側に位置する (つまり述語から遠い、最後尾に接続する) のと同様に、ダグール語の =dee も外側の階層の終助詞である可能性がある。次の例 (23) の =iiy=dee は =yee=dee の変化した形で、疑問マーカーの =yee を含むが、文全体では疑問というより反語として用いられるものであるという (恩和巴図（编）1989: 433)。

(23) [B] *ul ire-n=sul=iiy=dee.*
NEG to.come-NPST2=3PL=*YE*=*DE*
彼らはきっと来る 恩和巴図（编）(1989: 433)

ところが =dee は、形動詞形述語に後続する例も見られる (24)(25)。これはモンゴル語の daa の分布から帰納される予測に反するものである。

[20] ただし、筆者のデータではこの形式の用例は得られていない。恩和巴図（编） (1989) はこれをモンゴル語の šdee (<šüü dee (文語形 site)) に相当するものであるとしている (強調は筆者による)。bišen dee「～じゃないか」のような形式に由来するものである可能性もある。

(24) [H] *bii kergul tergul asoo-gu-d aa-gaas-aa yuguu tueeri-gu dee!*
1SG if road to.ask-PTCP-DAT COP-COND-REFL why to.be.lost-PTCP *DE*
もし道を聞いていたらどうして迷うことがあったろうか 塩谷 (1991: 85)

(25) [H] *ter keekee-yii use-ini hoo ter nogu-i-yiini wailhen aa-ǰ+aa-g de*
that cat-GA hair-3SG all that dog-GA-3SG near to.be-SIM+COP-PTCP *DE*
その猫の毛が犬の近くにあったのだ

これは非過去の定動詞接辞の後ろに =dee が現われ得ないことを示すものではない。次の例 (26) のように他の終助詞を介するならば、定動詞接辞であっても共起し得る。

(26)[B] *xaluun udur bol-bei=kaw=dee.*
hot day to.become-NPST=*KAW*=*DE*
暑い日になるだろうね 恩和巴図（编）(1989: 442)

逆に他の終助詞を介さない場合は =dee は使用されない。このことは、=dee が時制やモダリティの面で無標の場合に使用されないことを示している。=dee の機能は働きかけや話者の態度などについて「妥当化」を図る (「正当であると認識させる」ための) ものであるからだと考えられる。非過去時制の場合に「妥当化」のプロセスを経るために必要な要件として、形動詞接辞 -g(u) を用い、モダリティ的な機能において有標となった例が (24)(25) である。ここでは形動詞接辞が (「説明」などのような)「ノダ文」に相当するようなモダリティ的意味を担っていると考えられる。

3.5. 推量に係る要素

恩和巴図（编）(1989) は推量語気詞として =kaw(oo)~=woo~aalwoo, =b(e)iǰ(ee)~=ǰ(ee), =baa、猜測語気詞として =aǰ を挙げている。推量語気詞は「だろう」のような意味を表すもので、次の例 (27) では =kawoo を =baa に置き換えることもできるという。猜測語気詞について塩谷 (1991: 70) は「自問」と呼び、ハイラル・ダグール語につき =aǰ に当たる終助詞として =aaǰ という形式を取り上げている (28)。

(27) [Q] *in gonzuo-d yaar-ii-bei, moroosoo ir-ǰ*
3sg job-DAT to.be.busy-PROG-NPST maybe to.come-SIM
ul šad-n=kawoo.
NEG to.be.able-NPST2=*KAWO*
彼は仕事が忙しいからたぶん来られないだろう

(28) [H] *buni udur yaw-wei=aaǰ=yee?*
tomorrow day to.go-NPST=*AJ*=*YE*
明日行くだろうか？ 塩谷 (1991: 70)

これらのうち、=aalwoo, =ǎj~=aaǰ は名詞述語や形動詞形述語に後続する例 (29)(30) も見られる。ただ、これらは存在動詞 aa に由来する形式であり、そのコピュラ的な用法の名残として形動詞形に後続するものと思われる。この点で、これらは文法化の途上にあると言いうるだろう。 なお、b(e)iǰ(ee) が形動詞形の後ろに用いられる例は得られていない。

(29) [B] *higkeelii hii-sen aas sain aalwoo.*
little.bigger to.do-PERF COND good *AALWOO*
大きめに作ったら良いだろう 恩和巴図（编）(1989: 442)

(30) [H] *buni tenger yamer bol-gu aaǰ=dee?*
tomorrow sky how to.become-PTCP *AJ=DE*
明日は天気どうなるだろうか 塩谷 (1991: 65)

問題となるのは、これらの形式 (=baa を除く、=kaw, =b(e)iǰ, =aǰ) が動詞述語と述語人称の間に現われる例が見られることである。

(31) [B] *taa xoir tašier-ǰ+aa-bei=kaw=taa.*
2SG two to.mistake-SIM+COP-NPST=*KAW*=2PL
君らは間違っているんだろう 恩和巴図（编）(1989: 442)

(32) [B] *bii mange=biǰ=bi.*
1SG great=*BIJ*=1SG
私は強いだろう 恩和巴図（编）(1989: 443)

(33) [B] *badi hii-ǰ šad-bei=č=aǰ=daa=yee?*
1PL.INCL to.do-SIM to.be.able-NPST=also=*AJ*=1PL.INCL=YE
我々にできるだろうか 恩和巴図（编）(1989: 447)

3.6.その他の要素

恩和巴図（编）(1989) の挙げる語気詞のうち、残るは醒悟語気詞、祈使語気詞である。醒悟語気詞とは気づきや驚きを表すもので、=k(ee) (=dee が続くと母音が落ちるという) が該当する。祈使語気詞は希求の定動詞接辞の後ろに用い、命令などの語調を和らげる =kene, =kenee がある。

(34) [H] *uǰi-gu-d bii ene ahuur-ii ems-gu-d-mini ul bart-en=kee.*
to.see-PTCP-DAT 1SG this pants-GA to.wear-PTCP-DAT-1SG NEG to.fit-NPST2=*KE*
見たところ私がこのズボンを履いても合わないよ 塩谷 (1991: 82)

(35) [B] *nek dal badaa id-yaa=kee!*
one buckwheat meal to.eat-VOL=KE
ひとつお蕎麦でも食べましょうよ 恩和巴図（编） (1989: 441)

(36) [Q] *bii* *nee-ø* *šad-g-wu=maa,* *šii* *ir-ǰ* *nee-ø=kenee.* (=(3))
1SG to.open-SIM to.be.able-PTCP-NEG=1SG 2SG to.come-SIM to.open-IMP=*KENE*
私は開けられないんだ、ちょっと開けてくれないか

ところで =kee には同音異義の不変化詞 (「強調」を表す小辞) があり、恩和巴図（編）(1989) の言う強調語気詞に当たるものである ((37) の =wul の類)。次の例 (37) では =kee が述語人称 (=sul 3PL) に先行するように見えるが、これは終助詞ではない。

(37) [B] *ted* *ir-bei=kee=wul=biǰ=sul=dee.*
they to.come-NPST=*KE*=EMP=*BIJ*=PL=*DE*
彼らはきっと来るだろうな 恩和巴図（編）(1988: 443)

この他に塩谷 (1991; 75) では =gue という「婉曲的否定疑問」の形式を挙げている。これは否定疑問の形式で、婉曲的に誘いかける働きがあるものと思われる。

(38) [H] *yaw-wei=ši=gue?*
to.go-NPST=2SG=*GUE*
行かないのですか 塩谷 (1991: 75)

4. その他の周辺的要素

4.1. 要素 AA について

母音調和による異形態を持つ AA という形式が、恩和巴図（编） (1989) では肯定語気詞 (=dee, yum などの仲間) と呼喚語気詞 (呼びかけに用いる) に挙げられている。後者については「長母音や二重母音、n で終わる語の場合は語末音節を強めるだけで、呼喚語気詞は用いない」(恩和巴図（编） 1989: 448) とされる。

塩谷 (1991) がまとめるハイラル・ダグール語の例を観察すると、n 以外の子音で終わる文では全て AA が現われている。そこで筆者はこれを「文末 (文の切れ目) をマークする超分節的な要素」であると考え、本質的に恩和巴図（编） (1989) が扱う AA と同一のものであると見る。その出現の有無は、文末の音環境 (長母音や二重母音および n の後ろでは現れない) ばかりでなく、当該の文の調子 (イントネーション) や方言差個人差などによっても条件付けられると思われる。(8) の定義「それ自体は文の成立に関与しない」を考えると、文の切れ目をマークし文の成立に関与するものであるという点で終助詞とは見なさない[21]。なおチチハル・ダグール語では文末位置の n 音が一律脱落し、AA として実現する (40)[22]。

[21] これを「超分節的な要素」としたのはイントネーションなどに左右され、分節音で現れないこともあるという観察に基づくものである。こうした分節音で現れないことがあるという特徴も、終助詞 (という語) と認めたくない根拠の一つである。

[22] これはチチハル・ダグール語において非過去の定動詞接辞 -n が常に -ø として実現することを意味するものではない。次の例の波線部に見るように、-n の後ろに他の要素が後続すれば (= -n が文末位置に来ないのであれば) -n として実現する。

(39) [H] *ene saren bajir ee. namd nek aruun saren ul uk-n=ši=yee?*
this umbrella darty AA 1SG.DAT one clean umbrella NEG to.give-NPST2=2SG=YE
この傘は汚いので、きれいな傘をくださいませんか 塩谷 (1991: 64)

(40) [Q] *in yuguu ul ir-ø ee.*
3SG why NEG to.come-NPST2 AA
彼は何故来ないんだ

4.2. 述語人称と終助詞の承接関係

当該の述語が言い切りの形であるかどうかの補助的な判断基準としても用いた述語人称は、3.3. でも見たようにより述語位置に近いものである。述語人称そのものは屈折形式ではなく、母音調和を受けず先行する語類を問わない接語であり、3.5. でみたように述語との間に終助詞の介入を許すという性質がある。そして言い切りの形に後続するものであることから性質としては終助詞に近いものであると考えられる[23]。

風間 (1992) はエスキモー語を例にとって「動詞複合体を閉じる屈折形式が人称の範疇をふくむ言語は他にも多くみられる」(風間 1992: 258) としている。ダグール語やブリヤート語などに見られる述語人称もこれに似るが、動詞複合体というよりは名詞述語などを含む述語を閉じる形式であると言える。

本稿を通じて得られた終助詞をまとめ、述語人称を含めた承接関係を次のように提案する。用例が十分に得られず、検討も不十分なものについては< >括弧を付した。

推量	述語人称	働きかけ	「妥当化」
=kaw	=bi	=(yu)moo	=dee
=b(e)ij	=či	=yee	
=aaǰ	=baa	=kee	
<=baa>	=daa	<=kenee>	
	=taa		
	=sul		

図 4. ダグール語の終助詞の承接関係 (試案)

図 1, 2 と同じく、左に行くほど内側 (述語に近い) であり、この序列に従って承接する。本稿ではその機能について十分な検討ができなかったが、凡そ一番内側に話し手の判断に関わるもの (推量など) が入り、それより外側に「働きかけ」として疑問や希求に関わるものが来ると考えられる。この両者の間に主語人称と一致する述語人称の要素が入る点が興

[Q] *šii dang-aa ul oo-n=ši=e.*
2SG tabacco-REFL NEG to.drink-NPST2=2SG=YE あなたはタバコを吸わないんですか。

[23] 逆に、終助詞たることを否定する根拠はあまり見当たらない。述語人称は基本的に人称代名詞に由来するものであると考えられ、語源がはっきりしている点は他の終助詞と異なる。また定動詞非過去の形式とは融合の度合いが高い (分析不可能に近い) ことなども終助詞的でない理由の一つになるかもしれない。

味深い。

5. おわりに

本稿ではダグール語に見られる終助詞の様相を概観した。その際、定義として定動詞接辞を取る述語の後ろで用いられ得るかどうかを重視し、ダグール語の =yee, =dee などの終助詞についてモンゴル語など近隣の他のモンゴル語族の対応形式との異同を明らかにした。さらに、ダグール語の述語人称を終助詞の承接関係の中に位置付け、結論として推量などの意味を表す終助詞と疑問などの働きかけを表す終助詞の間に述語人称が入り込むことがわかった。

図 2 で見たモンゴル語の終助詞と図 4 とを較べると、単純にダグール語はモンゴル語よりも終助詞が多いということも見いだせる。このことはダグール語では定動詞叙述の形式がモンゴル語より少ないことや、名詞類述語を用いたモダリティ的表現が限られていることなどと無関係ではないと考える。こうした面からダグール語とモンゴル語の異同を洗い出す研究が俟たれるが、筆者の当面の課題としたい。

本稿では先行研究をきっかけとして終助詞を広く観察したつもりだが、既存の文献から目の届く範囲でしか見いだせなかった要素もあり、この点において網羅的な研究にはなっていない。この点についても今後さらなる発展の余地があると考える。

謝辞

本稿の執筆にあたり、二人の査読者の方から適確なご指摘と丁寧なご意見をいただきました。ここで心よりお礼申し上げます。ご指摘いただいた箇所については筆者の力の及ぶ限り修正を加えましたが、なお十分に意図を反映できていない部分もあるかと思います。また当然のことながら本稿におけるいかなる誤謬も筆者の責に帰せられるものです。

略号一覧

-: 接辞境界
=: 接語境界
+: 複合語内部の語境界
ANT: anterior 先行
ACC: accusative 対格
ASS: associative 連合
COND: conditional 条件
COP: copula コピュラ
GA: genitive-accusative 属対格
GEN: genitive 属格
DAT: dative-locative / dative 与位格 / 与格
EMP: emphasis 強調
EXIS.NEG: existential negative 非存在
INC: inclusive 包括
INT: interrogative 疑問
NEG: negative 否定
NPST: non-past 非過去
PERF: perfect 完了
PL: plural 複数
PN: proper name 固有名詞
PROG: progressive 進行
PROP: proprietive 恒常的所有
PTCP: participle 形動詞
REFL: reflexive 再帰
SFP: sentence-final particle 終助詞
SG: singular 単数

IMP: imperative 命令
IMPF: imperfective 未完了
SIM: simultaneous 同時
VOL: volitional 願望

参考文献

恩和巴图（编）(1988)『达斡尔语和蒙古语』呼和浩特: 内蒙古人民出版社
嘎日迪 (2006)『中古蒙古语研究』沈阳: 辽宁民族出版社
ジンガン (2010)「モンゴル語のモダリティ: コーパスに基づく記述的研究」東京外国語大学博士論文
風間伸次郎 (1992)「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人（編）『北の言語: 類型と歴史』pp. 241-260. 東京: 三省堂
小澤重男 (1997)『元朝秘史 (下)』東京: 岩波書店
塩谷茂樹 (1991)「ダグール語ハイラル方言の口語資料 ―テキストと注釈―」『日本モンゴル学会紀要』 No.21(1990) pp. 47-95.
山越康裕 (2006)「シネヘン・ブリヤート語」中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く ―フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ―』pp. 271-298. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

『元朝秘史』の出典：「東北アジア研究センター　言語資料検索システム」
http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/ (2016/12/12 確認)

Sentence-Final Particles in Dagur

Yohei YAMADA
(Tokyo University of Foreign Studies)

This paper defines sentence-final particles (SFPs) in Mongolic as dependent words which can be placed after a finite verb suffix, and discusses SFPs in Dagur. According to our investigation on SFPs in Dagur, three properties can be pointed out; first, interrogative markers obtained a feature of SFP more than other Mongolic languages and achieves the character as an SFP; second, the usage of *=dee*, the similar form of which can be found in Mongolian, is more complex and may beused for representing validity of speaker's attitude; third, inferential particles are placed before the predicative personal marker, and it reveals the fact that predicative personal marker behaves as clitic.

（やまだ・ようへい　yamadabayar@gmail.com）